

# 私の物語

tadotte@sashi.com

をたどって

1

雪が降っていた。

糸川昌成(57)は5歳の冬の朝、ふいに叔父に抱きあげられて車に乗せられた。わけも告げられず祖母の家へ。凍てつく道にチェーンの音だけが響いていた。それが、入院する母との別れの日だった。

糸川は分子生物学者で精神科医。ミクロの遺伝子で統合失調症を研究する第一人者で、31歳のとき世界で初めて統合失調症と関連する遺伝子の変化を発見して研究者としてデビュー。今は東京都医学総合研究所の副所長、東大

学院の客員教授でもある。

糸川は長年、秘密をかかえて生きてきた。母親が統合失調症だったことを隠してきた。50歳を目前に公表し、人生が大きく変わった。

あの雪の日から父方の祖母、伯母の家で育つ。大家族で寂しさはまぎれたが、母のことをきくと大人が困った顔をする。死んだか離婚したのかと思っていた。

生きていくと知ったのは21歳のとき。医学部入学でとりによせた戸籍謄本に母の名があった。「みゆき」。どこにい

## 隠した母の病 恐怖との闘い



①母親のみゆきに抱っこされる糸川昌成(1996年、東京・新宿、糸川さん提供)  
②糸川昌成は「50年生きてきて今が一番幸せ」という。そばに笑顔の母の写真(中井征勝撮影)



るのか。家中探して、叔父の古い日記に「分裂病(現・統合失調症)」の走り書きをみつけ、入院を知る。医学部の6年間は、「恐怖との闘いだった」。

誰もがなりうる病で回復可能と医師も語るが30年前は悲観的だった。「進行して人格荒廃、廃人に。遺伝も。20代は発症しやすい」と教わった。俺も廃人……。発症におびえた。鉄格子の中の患者さん

たちの姿は痛ましかった。1989年、東京医科歯科大精神科神経科に入局。親の話になるとカルテで顔を隠しておどおどした。外来で「気の毒な患者さんの回復を」と願う。でも「気の毒な母はど

うする」と自分をせめた。母に会いたい。孫をみせたい。だが変わり果てていたら……。勇気がでないまま、20年近くが過ぎた。

2000年2月1日早朝、当直していた病院に叔父から電話があり、母の死を知った。遺体を引き取りに行つて愕然とする。車で20分ほど、こんな近くにいたのか。変わり果ててなどない美しい母。だが頬にふれると冷たい。

なぜ、生きている間に会わなかったのか。もう間に合わないじゃないか。後悔に打ちのめされ、自傷的とも思えるほど研究にのめり込んでいた。許しがたい自分への許しを求めて鞭打つ日々だった。「母は僕を身ごもって発症

している。僕が生まれなければ母は不幸にならなかったとずっと思ってきた。でもある日、母の病を研究して治す薬を創ろうとしている僕には、生まれてきた意味があった、と思えるようになった」

15年3月、日本統合失調症学会で糸川は人生を語った。科学者、医師、そして子として生きた50年。それは人が「病むこと」と「回復」が織りなす物語でもあった。

大切な人との突然の別れ、病、さまざまな喪失……。人生にはどうしようもないことがおきる。そこからどのように「回復」して生きてゆくの。それぞれの「私の物語」をたどりたい。

敬称略 (生井久美子)